

【佳作】

「メディアイベントとしての甲子園野球」

——吹奏楽コンクールとの比較を通して——

国際日本学部 歴史民俗学科2年

阿部 真波

序章

毎年、夏に行われる全国高等学校野球選手権大会、通称「夏の甲子園野球」は、今や日本の夏の代名詞ともいえるイベントである。選手の汗や涙、真夏の太陽の下で懸命にプレーする姿に胸を打たれる人も多いのではないだろうか。

高校球児たちの実力発揮の舞台として捉えられがちな大会であるが、実は第一回全国優勝野球大会の頃から、主催者は朝日新聞社となっており、メディアによって企画された「メディアイベント」と呼ぶべきものであるのだ。つまり、元々は球児たちの実力発揮の場として創始された大会ではなく、朝日新聞社が経営戦略の一環として打ち出したイベントなのである。

メディアイベントである以上、主催した企業の業績を伸ばすために機能することが最も重要であり、本来それ以上の力は必要ではないのだが、現在の甲子園野球に関しては、主催者の名前が霞むほどの権威と人気を獲得している。メディアイベントの枠には収まらない成長を遂げたといえるだろう。このような独自の発展を遂げたのは、おそらく甲子園野球だけだと考えられる。

そこで比較してみたいのが、全日本吹奏楽コンクールである。この大会も、甲子園野球と同じく朝日新聞社が主催しているため、メディアイベントとしての機能を持つことが考えられる。しかし、甲子園野球に比べると、知名度や注目度も低い。同じ企業が主催しているのだから、吹奏楽コンクールにも

メディアイベントとしての機能がみられて良いはずなのだが、なぜか甲子園野球だけが力を持っているようにみえる。

本稿では、甲子園野球が、なぜこんなにも権威と人気を手に入れることになったのかについて、大会開催の経緯や、同じく朝日新聞が主催する吹奏楽コンクールというイベントとの比較を用いながら考えていきたい。

第1章 メディアイベントとして選ばれた武士道野球

朝日新聞社が、自社の記事の売り上げを伸ばすためのメディアイベントとして、野球というコンテンツを選んだ理由には、日本において野球が普及するまでの特異な流れが関係していると考えられる。

野球は、明治期にアメリカから日本へもたらされ、主に高等教育機関を中心に全国に普及していった。特に野球の普及に貢献したとされているのが、当時「一高」の名で呼ばれ、国家に選ばれた人材、いわゆるエリートが通っていた学校である、第一高等学校だ。一高では、エリート精神を養う場として野球部が機能していき、その中で礼の精神や、体を張る武士道的素養などが中心に据えられたブレースタイルが確立していくことになる。それは後に「武士道野球¹⁾」と呼ばれることになった。ヨーロッパなどにおいては、スポーツ文化は地域を中心に発展していくものとするのが普通であるが、日本におい

1 高田俊輔「スポーツを通じた進路選択の歴史的成立過程に関する一考察」

大阪大学大学院人間科学研究科教育学系 『大阪大学教育学年報』 21号 p 117～131 2016年 p126より引用。

では、スポーツが学校を中心に部活動として発展していったという点がかなり特異であり、特に野球というのは、一高を中心として、独自の競技に変化していった²といえる。

当時の一高野球部は、横浜公園にて外国人野球チームとの対戦³も行っており、1986年5月に行われた試合では、29対4という圧倒的な点差で勝利を収めている。これが日本における最初の国際試合⁴であったというから驚きだ。外国からやってきたベースボールが日本で独自の発展を遂げ、武士道野球を確立させたことにより、新たな強さを手に入れたといえる事例だろう。

1910年代になると、「一高時代⁵」とも呼ばれる学生野球全盛期がやってきた。その頃の日本は日清・日露戦争を終えたばかりでありながら、世界におけるさらなる権威獲得のため、次の戦争（後の日中戦争やアジア・太平洋戦争）への準備が進んでいた時期でもあった。そんな時代の日本人において、重要視されたのは国を第一に考える心であった。それによって、国家主義的思想の象徴ともいえる武士道野球は、人々の目に「あるべき姿」として映ることになっていった。朝日新聞はこのような状況を見逃さなかったのだ。

当時の各新聞社は、自社記事の流通を拡大することだけでなく、文化支援活動を通じて知名度を向上させるとともに、記事の題材確保を狙っていた。つまり、メディアイベントを行うのであれば、なるべく人々の注目を集めやすいものであると同時に、文化支援になるイベントを企画することで社名を売り込み、記事の囲い込みをしたかったのだ。その点で考えると、野球というのは人々からの注目を集めて

いるコンテンツであり、イベントを主催すれば文化支援も記事の囲い込みも可能だ。加えて、国家主義的思想を持った武士道野球を大々的に記事にすることで、戦争へと向かっていく日本を鼓舞することにもつながる。朝日新聞は、野球が特異な発展を遂げたことによる世間への影響は多大なものであったことに目を付け、メディアイベントとして取り上げたのではないかと考えられる。

第2章 第一回全国優勝野球大会の開催

一高時代の最中である1915年、遂に朝日新聞社主催の全国優勝野球大会が開催⁶されることとなった。言わずもがなこの大会は、後に正式名称を全国高等学校野球選手権大会とし、今日の甲子園野球となる大会である。

大会開催を知らせる新聞記事⁷をみると、その日の朝刊の一面中央部に大きく書かれた「本社主催 全国優勝野球大会⁸」の記事が、かなり目立つ配置になっている。現代の新聞では、読者の自然な視線の流れを意識し、右上のトップニュースから順に読ませるような記事の配置になっていることが大半であるが、この紙面はそれとは異なり、大会開催の情報をどのニュースよりも目立つように配置している。このような点からは、朝日新聞社がこのメディアイベントに相当の自信があった様子がうかがえる。

記事の中身をみていくと、野球に対して「著しく我國民性と一致⁹」しているというような記述がみられる。これは、武士道野球の考え方が、当時の国家

2 高田俊輔「スポーツを通じた進路選択の歴史的成立過程に関する一考察」 大阪大学大学院人間科学研究科教育学系『大阪大学教育学年報』21号p 117～131 2016年 p 118

3 読売新聞「第一高等學校學生闘技に外人に勝つ」1896年5月25日 朝刊

4 朝日新聞「日本の野球、アメリカの野球（天声人語）」1995年10月19日 朝刊

5 福田拓哉「わが国のプロ野球におけるマネジメントの特徴とその成立要因の研究 —NBPの発足からビジネスモデルの確立までを分析対象に一」 立命館大学経営学会『立命館経営学』第49巻p 135～159 2011年 p 141

6 朝日新聞「本社主催 全国優勝野球大会」1915年7月1日 朝刊

7 注6に同じ。

8 注6で示した記事より引用。

9 注6で示した記事より引用。

主義的考え方に基づいたものであるのと同時に、当時の人々の国民性、あるべき姿とされていたことを明確に示しているといえる。また、「全國大會の催しあるを見ず、本社は之を遺憾とし¹⁰」という記述からは、野球の大会を主催することで、自社の記事の売り上げにつなげたいという思いや、文化支援のメディアイベントを行うことで、社名を売ろうという純粋な思いではなく、国民の理想の姿の象徴ともいえる武士道野球の大会が行われていないという事に問題だと感じているように読み取れる。大会の条件からは、参加選手の交通費は、往復どちらも大会側が負担¹¹することになっているということも分かり、そういった点からも朝日新聞社の気合を感じる。

当時の朝日新聞社は、野球を一般的なメディアイベントとしてではなく、この時代を生きる人のあるべき姿としての武士道野球を示していくため、この大会を利用しようとしていたと考えていたのかもしれない。

第3章 吹奏楽コンクールとの比較

次に、同じ朝日新聞社が主催している吹奏楽コンクールについてもみていきたいと思う。吹奏楽コンクールは、1935年に第一回大会が開催されてから現在まで、長きにわたって行われている、吹奏楽界における国内最大級の大会である。甲子園野球と同じく、各地域の支部大会で勝ち抜いた学校が、全国大会に出場できるという形式をとっていることや、開催時期が夏であるという点が甲子園野球と似てい

ることなどから、「吹奏楽の甲子園」とも呼ばれている。

さらに、当時の新聞記事¹²を読んでいくと、吹奏楽部も野球部と同じように、練習や準備に相当な時間を費やしていることが分かる。日本の野球というのはアメリカのものと比べて「練習至上主義¹³」と呼ばれていたようで、勤勉そのものを美徳、価値とする考えが広くみられたようだ。どうやらその考え方は野球だけではなく、吹奏楽界にも浸透していたということが記事から読み取れる。このように、大会へ向けた準備として費やした時間の量や努力という面から考えると、野球と吹奏楽はかなり似た部分があると考えられる。

ちなみに私の通っていた高校¹⁴では、野球部と吹奏楽部のどちらの活動にも力を入れていたため、「野球部と吹奏楽部員は、授業で寝てばかりいる」と毛嫌いする先生もいたほど、部活中心の生活をする部員が多かった（もちろん全員ではないが）。日々の学生生活の中心が学業ではなく、部活動になってしまふほどに力を入れて活動していたのだ。学生生活のメインが部活動になってしまい、グラウンドでしか頑張れない野球部、楽器を持たないと頑張れない吹奏楽部というように、部活動でしか頑張れない学生が出てくるという共通点も挙げられそうだ。

今みてきたように、2つの大会の間にはいくつかの共通点があるものの、甲子園野球の知名度を考えると、吹奏楽コンクールは、まだまだ世間に知られていないように感じる。近年はテレビ番組¹⁵などで吹奏楽コンクールが取り上げられたり、小説¹⁶や映画¹⁷の題材として描かれたりするなど、吹奏楽コ

10 注6で示した記事より引用。

11 注6に同じ。

12 朝日新聞「練習追い込み 全日本吹奏楽コンクール東北代表の勿来工業高」1997年10月16日 朝刊

13 注4に同じ。

14 神奈川県に所在する横浜市立戸塚高等学校。

15 日本テレビ『1億人の大質問!?笑ってコラえて!』公式サイト「笑ってコラえて! 吹奏楽の旅SP」「笑ってコラえて! 吹奏楽の旅SP」 | 1億人の大質問!? 笑ってコラえて! | 日本テレビ (ntv.co.jp)
<https://www.ntv.co.jp/warakora/articles/396anoqt9hwzr4u87u1.html> (2022年10月13日閲覧)

16 『響け! ユーフォニアム』公式サイト 響け! ユーフォニアム〜北宇治高校吹奏楽部へようこそ〜 | 宝島社 (tkj.jp)
<https://tkj.jp/info/euphonium/> (2022年10月13日閲覧)

17 映画「20歳のソウル」公式サイト 映画『20歳のソウル』! 大ヒット公開中! (20soul-movie.jp)

ンクールが夏に行われる大会として認識され始めているものの、甲子園野球への人々の注目度とは比べ物にならない。今、この論文を読んでいるあなたも同じことを思っているだろう。大会の仕組みや部員たちの頑張りに関しての共通点がみられていても、大会そのものの知名度という面では、甲子園野球が一線を画しているといえよう。

2つの大会への注目度に大きな違いがあるということからは、メディアイベントとしての機能に関しても、大きな違いがあるともいえる。そうはいっても、吹奏楽コンクールも朝日新聞社が主催しているのだから、もう少しメディアイベントとしての機能を持っていたとしても良いのではないかと思う。この違いについてもう少し考えてみたい。

第4章 吹奏楽コンクールがメディアイベントとしての機能を持たない理由

甲子園野球と吹奏楽コンクールの知名度の差から考えると、吹奏楽コンクールにはあまりメディアイベントとしての機能が備わっていないように感じられる。その理由には、第一回吹奏楽コンクールの形式¹⁸が関係していることが挙げられるだろう。

第一回の吹奏楽コンクールというのは、朝日新聞社後援の「音楽週間¹⁹」というイベント内の企画として創始されたことが、当時の新聞記事²⁰に記されている。音楽週間というのは、全国的に行われた大規模なイベントであったようである。元々、吹奏楽コンクールは朝日新聞社主催の独立した大会ではなく、朝日新聞社後援の大規模なイベントの中の企画として始まったものであるため、主催が朝日新聞でない分、記事での利用の自由度は少し下がり、メディ

アイメントとしての機能は、大元のイベントである音楽週間が担っていたのであろう。これが吹奏楽コンクールにメディアイベントとしての機能がほぼ無い理由だと考えられる。

第一回における大会形式の影響なのか、現在に至るまで吹奏楽コンクール関連の新聞記事というのは、大会の結果を淡々と報告するものばかりが目立ち、甲子園野球のように読者を惹きつけようとする記事は少ない。ましてや夏の間の部活動において、吹奏楽部が自分たちのコンクールのための練習よりも、野球部の応援に力を入れているといったような記事²¹もみられる。そのような状況に対して吹奏楽部の顧問が、自分たちの大会に影響するのではないかと心配している²²ことから、炎天下での応援がかなり過酷であることを物語っている。球場のスタンドにて、吹奏楽部が野球部の応援をしている様子というのは、毎年みられる光景であるが、新聞の記事からは、吹奏楽部の夏のメイン活動が甲子園野球の応援であるかのように書かれている。

私は吹奏楽経験者であるため、自分たちの練習を差し置いて応援活動に取り組む部員たちを心配する顧問の気持ちは、とても理解できる。屋内で演奏するのと屋外で演奏するのでは、響きや隣の人の音の聞こえ方などが、まるで異なるからだ。これによって演奏する感覚がだんだん狂ってきってしまう。加えて、応援仕様の大きな音で吹き続けていると、次第に音が荒れてきたり、炎天下で吹き続けることによって、楽器が日焼けしてしまったりという問題もある。こういった面を考慮してか、私の所属する部では、野球応援に行く部員とコンクールに出場する部員は活動を分けており、コンクールメンバーが野球応援に行くということは減多になかった。しかし、今でも部員数の関係などで、野球応援とコンクール

<https://20soul-movie.jp/> (2022年10月13日閲覧)

18 朝日新聞「音楽週間に吹奏楽コンクール」1935年10月2日 朝刊

19 注18で示した記事より引用。

20 注18に同じ。

21 ①読売新聞「甲子園のナインを支えた帝京、東亜の影の“主役”たち」1987年8月23日 朝刊

②朝日新聞「吹奏楽部 加藤昇（オーケストラの舞台裏：60）」1999年11月19日 朝刊

22 朝日新聞「ヒット曲を応援歌に（白球201）高校野球神奈川大会」1990年7月18日 朝刊

のどちらも取り組む吹奏楽部員はたくさんいると考えられる。新聞記事²³と経験者の視点を合わせてみても、吹奏楽部が野球部のために身を削っているということに間違いはなさそうだ。

吹奏楽コンクールがメディアイベントとしての機能を持たず、世間からの注目度も低い理由には、第一回吹奏楽コンクールの形式から分かるように、メディアイベントとしての機能を持つ立場でなかったことと、その後の新聞記事によって、「吹奏楽部は野球部を応援する部活」といった刷り込みが行われたことによると考えられる。そして、それは現代に至っても残り続けている。

第5章 権威を持った甲子園野球

ここまでみてきたことで、甲子園野球と吹奏楽コンクールの2つには、いくつかの共通点がありながらも、メディアイベントとしての力には大きな差があるという事が分かった。これをもとに、甲子園野球が創始された当初に期待されたレベルのメディアイベントとしての力よりも、はるかに強い力を持ち、権威のある大会に成長していった理由について考えていきたい。

まず、甲子園野球が創始された理由として挙げられた、一高で栄えた武士道野球が、当時の国家主義的思考と一致したことが関係しているというのは、甲子園野球が権威を持ち始める段階においても、大きな影響をもたらしたという事は明らかであろう。そもそも創始にあたって、メディアイベントとしての目的よりも、国民性との合致という、本来メディアイベントが持つメイン要素と異なるものが前面に

押し出されていることから、一般的な力の中に収まりきるはずがない。また、戦争へと向かっていく日本において、自分の学校の名を背負って、ひたむきに戦う球児たちにフォーカスして報道することは、お国のために戦うこと、国家主義の正当化につながるともいえる。吹奏楽コンクールにはそのような性格は見られなかった。

ここで、1911年から始まった「野球害毒論争²⁴」についてもみていく必要がある。この論争は、1911年8月から始まった朝日新聞における「野球界の諸問題²⁵」と、「野球と其害毒²⁶」と題した、一連の連載記事をきっかけに始まったものである。一見、甲子園野球の発展には逆効果に見える事象であるが、ここから朝日新聞社が甲子園野球に求めた要素と、権威をもつイベントに成長していった理由が見えてくる。

この論争の最も興味深い点といえるのが、何といても後の甲子園野球の主催者である、朝日新聞社が展開した連載記事²⁷がきっかけであるという事であろう。

この頃、教育家たちによる野球への批判が高まり、学生野球を問題視する声が多くみられた。具体的な問題点として挙げたのは、学力不振、野球人気による華美な選手の育成、私立学校の広告利用など、多岐に渡る。それに対して、第1章にも記した通り、野球への人々の注目は並大抵のものではなかったことから、この批判に対して野球擁護派²⁸が現れ、議論は白熱しているという状態であった。ここで出されたのが例の連載記事だった。

ここで、朝日新聞が論争の1年前に出した記事²⁹をみてみる。そこには、野球が一高の手から離れて著しく俗化したことによって、野球の興行化が起

23 注21、22に同じ。

24 有山輝雄『歴史文化ライブラリー 14 甲子園野球と日本人 メディアのつくったイベント』吉川弘文館 1997年 p 47より引用

25 朝日新聞において、1911年8月20日の朝刊から同月24日の朝刊に掲載された連載記事。

26 朝日新聞において、1911年8月29日の朝刊から9月19日の朝刊に掲載された連載記事。

27 注25、26で示した記事を指す。

28 私立学校卒業生を中心とする野球クラブなどがこれにあたる。(有山輝雄『歴史文化ライブラリー 14 甲子園野球と日本人 メディアのつくったイベント』吉川弘文館 1997年 p 47)

29 朝日新聞「野球の興行化」1910年11月25日 朝刊

こっているというような記述がみられた。ここから分かることは、朝日新聞社が連載記事によって野球を批判するよりも前、既に野球の俗化に気付いており、これを問題と捉えていたということである。一高時代と呼ばれた時代が築かれ、野球が日本中に広まっていったことはプラスと捉えられても、それが一高らしい武士道野球の性格を失っているのでは、意味がないと考えていたということだ。朝日新聞社にしてみれば、野球というのは、一高野球部と同じく国家主義的思想のもと、エリート精神を養う場として機能した武士道野球であってこそ、本来の姿なのであろう。

このような朝日新聞社の主張を見ていくと、甲子園野球を主催することで果たしたかった目的が見えてくる。それが、一高の手から離れていったことにより「俗化」してしまった野球を、「指導・監視」する立場として、大会を運営していくということである。

この論争が起こった後に、後の甲子園野球と呼ばれる全国優勝野球大会の開催が決定するのだが、ここで、開催決定の際に出された新聞記事³⁰を思い出してみる。朝日新聞社は、国民性にぴったりと合致する野球の大会が、未だ開かれていないことを遺憾としているという様子であった。しかし、この野球害毒論争を考慮して記事の意味を再考すると、一高の武士道野球として発展した野球は、その後いろいろな学校で形を変えながら広まっていったものの、初期の武士道気質は薄まっていった。それは全国大会が無いからではないか、と考えているようにも感じる。この野球の問題を世間に広めるため、先に批判の記事を連載し、「武士道野球を取り戻すべきだ」という意識を読者に持たせた後、朝日新聞社が大会を行うことで、野球が再び指導・監視の下に置かれ、武士道野球を取り戻すことにつながることを強調したかったと考えられる。

朝日新聞社が野球の大会を主催した最初のきっかけというのは、メディアイベントを開くことによる

売り上げ向上を狙うことや、記事の囲い込みを行うこと、そして文化支援をすることによる社名の売り込みといったところであったかもしれない。そこに第2章でも言及した通り、大会によって人々のあるべき姿である武士道野球を広めるためという目的も加わっていったと考えていた。しかし本当のところは、武士道野球を広めるというよりも、揺らぎ始めた武士道野球を正しい形へと修正していくことが理由であったといえそうだ。戦争へと向かっていく時代の中で、人々のあるべき姿とされた球児たちのその姿が、野球の広まりとともに揺らぎ始めていたことへの危機感が、ただのメディアイベントに収まらずに、このような大きな問題が持ち込まれていたと考えれば、甲子園野球の権威の強さは説明がつく。

毎年行われる甲子園野球を思い出してみれば、妙に形式張っているルールや場面が多く見られるだろう。肩の消耗を引き起こすほどのピッチャーの連投³¹は昔から言われている問題であるし、炎天下での長時間プレー³²なども疑問視され始めている。疑問視されているが無くなっていないこの状況を見ると、武士道野球特有のエリート主義の名残なのだろう。

第6章 朝日新聞の決定は意識的か、無意識的か

朝日新聞社が甲子園野球を主催する目的には、俗化によって薄れ始めた武士道野球の気質が失われないようにしたかったという意図があったと考えられることが分かった。しかし、私の中には一つの疑問が残った。「国家主義が第一とされるこの時代に武士道野球が失われてはならない」、「全国の球児を統一して、武士道野球をプレーさせなければ」という考えは、意識的に生まれたものなのか、はたまた無意識的に生まれたものなのかということである。国家主義が正当化、もっといえは国家主義のみが正当化されていた時代に、朝日新聞社は、この大会を企

30 注6に同じ。

31 朝日新聞「(パブリックエディターから) 節目の100回大会 猛暑の甲子園に行ってみた」2018年9月11日 朝刊

32 朝日新聞「(Re: お答えします) 甲子園の熱中症対策は？」2015年8月14日 朝刊

画したわけである。ということは、当時の人々の中の無意識的なところには、既に国家主義の考え方が入り込んでいた可能性も否定できない。

日清戦争を終え、間もなく日露戦争へと突入する頃であった1903年、日本では国定教科書制度が制定された。つまり、学校で教えることは国が全て決定することになったのだ。その後の1907年には、小学校令改正によって、義務教育6年間の制度が導入された。この2つが意味することは、日本がさらなる戦争へと向かっていく時代において、教育内容に国が介入し、義務教育という一定期間、それを教え込まれることになったということだ。このような制度ができたことにより、国家主義的思想が人々に植え付けられていったのではないかと考えられる。直接この時代の教育を受けた若い世代はもちろん、その時代を生きた人々にも国の言うことは正しいという思想が植え付けられていき、国家主義という考え方が無意識に行われるようになった可能性が高いのではない。

そうなってくると、国家主義思想に基づく武士道野球の一般化を押し進めているようにみえていた朝日新聞の企画は、当時からすると特段騒ぎ立てるほどのものでもなく、至って自然な考え方であったのかもしれない。

現在を起点に考えると、朝日新聞社が行った全国優勝野球大会の企画というのは、武士道野球の復活を目標に、国家主義を強く表した異質なメディアイベントであり、そのために他とは異なる権威を獲得したように思えたが、当時の時代背景を考慮すると、このような発想に至ることは全く自然なことであり、国家主義自体が体に染み込んでいたことによるものも捉えられるだろう。甲子園野球が圧倒的な力を持ったのは、野球が日本にやってきて、広まったタイミングの時代背景に理由があるとも捉えられる。

終章

甲子園野球は、朝日新聞社が主催するメディアイ

ベントでありながら、その枠を超えた権威と人気を誇るものである。そのような特異性が生まれたのは、野球が日本において広まる初期の段階で形成された、「武士道野球」と呼ばれるものによると考えられる。国家主義教育のもとで、エリート育成のための野球が確立され、当時、戦争へと向かっていく時代であった日本にとっての、「あるべき姿」と認識されるようになった。

さらに、同じく朝日新聞社が主催している吹奏楽コンクールとの比較によって、野球部も吹奏楽部も練習至上主義であり、大会までの準備や練習への取り組みといった点では共通点がみられるものの、大会成立までの流れに大きな違いがあることから、2つのメディアイベントとしての機能には雲泥の差があることが分かった。「音楽週間」というイベント内の企画として創始された吹奏楽コンクールと、朝日新聞社が野球の俗化（武士道野球が失われていくこと）を止めるための、指導・監視という立場で創始された全国優勝野球大会（後の甲子園野球）という決定的な違いだ。

さらに、野球害毒論争直前の朝日新聞の発言から、連載記事の掲載に至るまでの流れからは、国家主義の思想が入り込んだ野球が、日本に広まっていく中で変化していったことをマイナスと捉え、朝日新聞社が野球という文化を指導・監視していきたいと考えた様子がみえてきた。このことから、朝日新聞社の国家主義に偏った思考が明らかになったと思われるが、国家主義的思想が国によって体に刷り込まれ始めた当時の時代背景を考慮すると、このような考えに至るのは自然であり、無意識的な決定によるものも捉え直すこともできるだろう。

意識的か無意識的に関わらず、一般的なメディアイベントとは異なり、国家主義的思想が絡んできたことによって、甲子園野球は権威を獲得するに至ったといえる。また、国家主義的思想に基づく野球というのは、野球が日本にもたらされた頃、人々のあるべき姿と重ねられていたことから、人気にも火が付いたのだろう。

現代の甲子園野球において、様々な疑問³³が世間

33 注30、31に同じ。

の中に存在していることは確かであり、大会自体が批判されるということもある。しかし、甲子園野球が創始された頃の時代では、このようなことが国に

よる刷り込みの影響により、「あたりまえ」の一言によって片づけられていたのかもしれないということとは、念頭に入れておく必要がある。

参考文献

- ・有山輝雄『歴史文化ライブラリー 14 甲子園野球と日本人 メディアのつくったイベント』吉川弘文館 1997 年
- ・津金澤聰廣、有山輝雄『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社 1998 年
- ・津金澤聰廣『戦後日本のメディア・イベント [1945 - 1960 年]』世界思想社 2002 年
- ・戸ノ下達也『日本の吹奏楽史 1869 - 2000』青弓社 2013 年
- ・外園豊基『最新日本史図表 二訂版』第一学習社 2019 年
- ・福田拓哉「わが国のプロ野球におけるマネジメントの特徴とその成立要因の研究 —NBP の発足からビジネスモデルの確立までを分析対象に一」立命館大学経営学会『立命館経営学』第 49 巻 p 135 ~ 159 2011 年
- ・高田俊輔「スポーツを通じた進路選択の歴史的成立過程に関する一考察」大阪大学大学院人間科学研究科教育学系『大阪大学教育学年報』21 号 p 117 ~ 131 2016 年